

証拠改ざん事件被害者 村木厚子さんの家族らが語る

郵便不正事件で無罪が確定した厚生労働省元局長、村木厚子さん(54)が、内閣府政策統括官として現場復帰して10日が過ぎた。大阪地検特捜部を存亡の機に直面させた証拠改ざん事件が、当時の特捜部長、大坪弘道容疑者(57)らの逮捕へと発展するなか、被害当事者の村木さんや家族は、何を思うのか。

【鈴木梢】

大坪容疑者らの逮捕が発表された一日夜。村木さんは取り囲む報道陣に「何とコメントしたらいいのかわかるか。責任を問うのではなく、真相解明を一番に考えてほしい」と冷静に語った。悲劇のヒロイン視報道にも自我を抑え、客観的に振舞う様子は、「今後の検察を、厳しく温かく見守っていきたい」と無念や恨みを表に出すことのなかった、無罪確定直後の記者会見に共通する。

村木さんが、本格的に仕事を再開させた先月27日。夫で厚労省の同僚でもある総括審議官の太郎さん(56)を執務室に訪ねた。太郎さんは、一貫した村木さんの対応に、入省後30年余で培った公務員気質と生来の性格を見る。

検察批判 口にせず

「はちきん」の胸の内



無罪判決を受け、心境を語る村木厚子さん。
確定までの日々が緊張のピークだったという
＝塩入正夫撮影

任官先に旧労働省を選んだのも、「当時の大蔵省と通産省のように、大きな絵を描いて世の中を動かしていくのではなく、一人一

「厚労省の仕事は、言ってみれば自分の考えを相手に分かってもらうということ。怒りをあらわにするのではなく、きちんと説明することが大切だと考えていると思う」

村木さんは高知市出身。地元の高知大を卒業し、78年に旧労働省に入った。坂本龍馬を生んだ土佐では、

も証拠攷ざんを知って隠していた。1年3カ月にわたって被告人の立場に置き、1年6月を求刑した。私はこれが一番、人間として許せない」

「説明が大切」公務員気質

人を相手に具体的な役に立ちたい」と考えたからだという。

それでも太郎さんは、冷静さを保つ村木さんの本当の気持ちかを代弁するかのように、大阪特捜の捜査に憤りを隠さなかった。

「二検事の犯罪かと思っていたが、裁判が始まったばかりの今年2月には幹部

男勝りで快活な女性を「はちきん」と呼ぶ。語源は諸説あるが、龍馬が慕った姉、乙女のように泰然自若かつ優しく頼れる女性像だという。「酒も好きだし、まさにはちきんですよね」と太郎さんは笑う。

同僚や知人も、村木さんについて異口同音に話す。村木さんは、06年10月か



この1年3カ月を「本当に得難いけれど、二度としたいくない経験」と振り返る村木太郎さん

から検察批判を聞いたことが、ほとんどない。07年、厚労省が年金記録問題で国民的批判を浴びたことが、脳裏にあるのではと感じる。だから、致命的な捜査ミスの被害者になっても、検察を擁護するような発言をする、とも思う。「検察は必要な組織でしょう。今、検察の置かれている立場はわれわれの数年前の立場と同じ。一部の検事のために信用を失い、多くは本当に悔しい思いをしているのではないか」。村木さんの胸中をこう推測している。

障害者の自立支援を行う社会福祉法人「フロップ・ステーション」（神戸市）の理事長、竹中ナミさん（61）は保釈後、大阪特捜の取り調べについて尋ねた。村木さんは「『この調べ官が、自分の部下やったら』

活は、すべてが非日常だった。24時間監視カメラ下に置かれ、月曜日から土曜日まで続く取り調べ。食事は麦飯が出た。心配する家族から1日おきに手紙が届き、結婚以来30年で初めて太郎さんと文通をした。

夜になると、冷房のない3畳の独居房にプロ野球の阪神戦が響き、耳を傾けているうちに巨人ファンから阪神ファンになった。

取り調べも接見もない日曜の夕方には、俳優の福山雅治さんの人気ラジオ番組が、房内に流れた。それまで番組を聞く時間などなかったが、低い声で冗談交じりに話す飾らない人柄にひかれ、毎週楽しみにした。

昨年8月30日には「脱官僚」を掲げた民主党政権が誕生することとなった。独

居房で二ユーを聞き、政
権交代で仕事のやり方も変
わるだろう」と不安も募ら
せた。

そんな非日常から解放さ
れた日、東京に戻る新幹線
で缶ビールを開けた。

自宅では、2人の娘と福さんの声がいい」と、太郎さんそっこのけで、福山さんの話で盛り上がっている。村木家では、今年から始まった福山さん主演のNHK大河ドラマ「龍馬伝」を見ろという。

無罪確定の先月21日に、太郎さんは逮捕以来、初めて村木さんの涙を見た。自宅で娘と抱き合って泣きじやくり、家族の緊張が一気にほどけたときだった。

この事件を経験しても、将来は公務員になりたいと話した。「この母にしてこの娘あり」。竹中さんは、血を受け継いでいると感じたという。

にほどけたときだった。

その翌日、初登庁した村木さんは、復帰会見で「拘留期間は163日。宇宙飛行士の野口聡一さんが地球を離れていた日数と同じです」と話した。非日常の日々を、一般人には想像も難しい宇宙生活と重ね合わせた。「子どもの虐待が非常に気になる」と言い、今後

の仕事について聞かれると「子どもや雇用政策は難しい問題が山ほどある」と、厚労省として早急に取り組むべき問題を挙げた。

与えられた執務室には新しいパソコンが用意され、分刻みのスケジュールが待っていた。マスコミからの取材依頼は、「仕事に専念したい」とすべて断っていた。「霞が関の乙女」に、忙しかった1年3カ月前の日常が、戻りつつある。



厚労省職員の出迎えを受ける村木厚子さん
 三9月22日、津村豊和撮影

ザ・特集